

高温条件下における果樹の栽培管理について

令和8年7月8日
農業振興課
農業総合センター果樹研究所

1 気象経過

農業総合センター果樹研究所（福島市）の平均気温は3月が6.3℃（平年差+0.4℃）、4月が13.1℃（同+1.5℃）、5月が17.9℃（同+1.0℃）、6月が20.0℃（同-0.8℃）となっており、6月を除き平年よりもやや高温で経過した。

また降水量は、3月が35.0mm（平年比49.9%）、4月が70.0mm（同89.7%）、5月が86.5mm（同101.9%）、6月が164.0mm（同142.2%）であった。梅雨入りは6月20日ごろとみられ、平年より8日遅い状況となっている。

2 土壌水分

果樹の発芽期以降、定期的にまとまった降雨があり、6月30日時点の土壌水分（pF値：果樹研究所なしほ場：草生・無灌水）は、深さ20cmで2.2、深さ40cmで1.9、深さ60cmで1.8となっており、概ね適湿状態である（図1）。

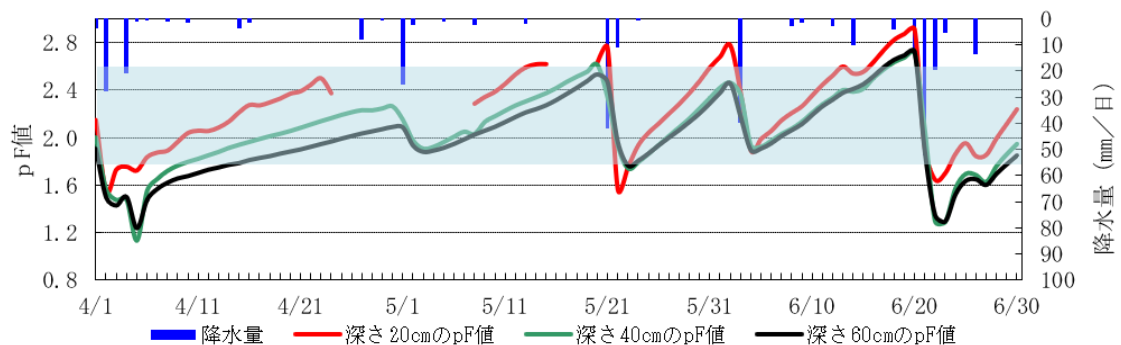


図1 土壌 pF 値の推移（果樹研究所なしほ場：草生・無かん水）

図中の網掛け部は、適湿の範囲（pF1.8-2.6）

3 今後の気象の見通し

仙台管区气象台が令和8年6月23日に発表した3か月予報では、向こう3か月（7～9月）の平均気温は平年並または高い確率が40%であり、降水量は多い確率が40%となっている。

4 果樹における高温・乾燥の影響

過去の高温・乾燥年の記録に基づく主要果樹への影響は表1のとおり。

表1 高温・乾燥による果樹への影響

(◎：影響大、○：影響あり、令和7年追加)

	影響	もも	なし	りんご	ぶどう	かき
品質	肥大不良	◎	◎	◎	○	
	着色不良	○		◎	◎	
	酸の減少				○	
	蜜入り不良			◎		
	異常成熟果 (生理落果・青実果)			◎		
	果肉障害	○	○			
	日焼け		○	◎	○	○
	横ヒビ・裂果			○	◎	○
	軟質果の発生	○	○	○	○	○
樹体	樹勢衰弱・枯死	○	○	○		
	黄変落葉	○	○	○		
	葉焼け		◎		○ハウス	
病害虫	ハダニ類	○	◎	◎		
	ナシヒメシクイ (晩生種)	○	○			
	ナシマルカガラムシ	○	○	○		

5 今後の技術対策のポイント

梅雨明け後の急激な気温上昇と高温乾燥により、生育に影響がでる可能性が高まるため、以下の対応により適切な栽培管理に努める。

(1) 土壌の水管理

乾燥が続く場合にはかん水を実施する。葉色の低下、葉の萎れや黄変落葉が見られる場合は早急な対策が必要である。

1回のかん水は25～30mm程度(10a当たり25～30t)を目安とし、5～7日間隔で実施する。

ももでは、収穫5～7日前以降のかん水は糖度など品質の低下につながりやすいので、かん水が必要な場合は早めに実施する。

なしでは、夏季の土壌乾燥により「あきづき」「王秋」でコルク状果肉障害が発生しやすいことから、状態に応じてかん水を実施する。

ぶどう等の裂果は、土壌水分の急激な変化で誘発されやすいことから、園地の状態に応じて定期的なかん水を行う。

(2) 草刈りの実施

樹と草との水分競合を防ぐため、草生園では草刈りを行う(地表面からの

蒸発散量は、草生園において刈り草をマルチした場合、草刈りしない場合の約半分とされる)。

(3) 新梢管理

新梢管理は樹冠内部の徒長枝を中心に、通常よりも軽めの夏季せん定を行うなど、骨格枝背面の日焼け防止や樹勢を落とさない管理を心がける。

樹勢が弱い樹では、発生した発育枝等は全て切除せず適宜残して配置し、適正な樹勢の維持を図る。

なお、りんごやぶどうでは、果実の成熟期に樹勢が旺盛な場合、果実の着色が劣りやすいことから樹勢の適正化に努める。

(4) 着果管理

りんごでは、果実に直射日光が当たると日焼け果が発生しやすくなるため、葉で隠れるような果実を残すなど着果位置に留意する。

ぶどうでは、着房過多が着色不良を助長させることから、適正な着房数に調整する。

(5) 適期収穫

ももでは、高温下で果肉の軟化が停滞し、さらに極端な高温条件下では着色が遅れる場合がある。また、気温が下がり適温条件域に入ることや乾燥条件から急な降雨により土壌水分が大きく変化した場合には、急激に軟化が進む可能性があるため、成熟状況に注意し適期収穫に努める。核や胚に障害を持つ果実では特に成熟が早まる傾向があるので、収穫が遅れないように注意する。

なしでは、熟度の進んだ果実で果肉が水浸状となる（みつ症）の発生が多くなることから、収穫が遅れないように注意する。

りんごでは、特に早生品種から中生品種にかけて、着色が不十分でも地色の変化や果肉硬度等の果実の成熟状況に注意し、収穫が遅れないよう適期収穫に努める。

ぶどうでは酸の減少が早まることから、食味を確認して適期収穫に努める。

また、いずれも収穫時の果実温度が高いと果実が軟化しやすい傾向にあるため、収穫は気温が低い時間帯に行い、収穫後は直射日光を避けて涼しい場所に保管する。

(6) 害虫防除

高温乾燥条件下ではハダニ類の発生が増加し、葉焼け等の被害を助長させることから、発生状況をこまめに確認し適期防除を実施する。また、ナシヒメシンクイやナシマルカイガラムシの発生世代数が増加し、特にナシヒメシンクイは9月以降でも、ももやなしの果実に被害を及ぼす可能性があることから、発生予察情報等を参考に防除を追加する。

6 参考資料

- (1) 平成 22 年の高温による農作物等への影響と技術対策
- (2) 平成 30 年高温・少雨対策の記録
- (3) 令和 5 年高温・少雨の影響